

「聖なる福音のはじめ」

創世記3章1-19節

クリスマスが近づいてきました。

教会にはクリスマスに備えた飾り付けがなされています。でも最近では教会だけじゃありません。商業施設や商店街、歩けばいまやどこも赤と緑に染まっています。ツリーだって目につきます。同じようなものを飾っているかもしれません。華やかさ^{かな}だっただけじゃありません。

でも、ぼくたちは同じように飾っているのではない。

この飾りをもって神さまを思い起こすのです。聖書の言葉を思い起こす。

神さまの生きた心を味わい直す。そこにこそ、このような飾りの醍醐味^{だいごみ}があります。そうやって味わい直されてきた伝統に生きています。だからこそ、きちんとみ言葉に聴きながらクリスマスに備えたいと思います。

クリスマスのはじまりは、どこにあるか。

それは、このツリーやクランツに飾られている「りんご」にあります。

この「りんご」は今朝、共にお聞きした創世記3章に登場する「善悪の知識の実」を象徴していると言われます。神さまから取って食べてはいけないと言われたあの「木の実」^きです。ただし、聖書には「りんご」とは書いてはいないのですけどね。

それはいいとして、ぼくたちは、この「りんご」をなんとなく飾っているのではない。この物語を思い起こすために。否、クリスマスのはじまりはいつもこの「物語」にある。その事実を忘れないために飾っているのです。

この物語は、2本の木をめぐるお話です。

「あれ？1本じゃないの」と思われた方もあるかもしれません。実は、エデンの園の中央には2本の木が生えていたと、聖書には書かれています（創2:9）。一本は先程お話しました「食べてはならない」と言われていた「善悪の知識の木」。食べることが禁止された理由は単純^{たんじゆん}です。「食べると必ず死んでしまう」からです。

そして、もう一本は「命の木」です。

この「命の木」については多くは語られていません。しかしその実を食べると「永遠に生きる者となる」とだけ後に語られています（創3:22）。

つまり園の中央には「命と死」を象徴する木が2本並んでいたのです。

片方は「命」につながり、片方は「死」につながる。

片方は食べることが許されていたが、片方は食べることが禁じられていた。

園の中央に植えられた2本の木。

ぼくはここに神さまの深い思いを受け止めます。あえて一本にしていないからです。

子どものころ、この物語を読むたびに思いました。

「なんで神さまはわざわざ食べたら死んでしまう木を植えたのだろうか」と。

わざわざ「善悪の知識の木」を植えなければよかったのに。

そうすれば、人はずっと神さまと一緒にエデンの園で暮らせたのに。

なんでわざわざ自分でトラブルの原因を作ったのだろうか。

誰だって「ダメ」だと言われれば、やりたくなるじゃないかって。

そう思っていました。

でも、今は違います。

神さまは、このエデンの園の中央に、トラブルを植えたのではない。

「自由」を植えたのだと、受け止めます。それは、「ご自分の言葉に背き、ご自分を否定する自由」です。「ご自分に向かってノーという自由」を人に与えている。

神さまは、力づくで人を支配されないのです。

たしかに、「ご自分に逆らう選択肢をあたえなければ」そもそもこんな問題は起こらなかったかもしれません。でも、そうなれば、人はただの操り人形です。ただの奴隷。ただのロボット。ただのイエスマンです。でもそうはされなかった。

なぜか。

神さまご自身が、自由のうちに人を愛されているからです。神さまご自身が、人に対してノーを突きつける自由をもっておられます。愛さないということだって不可能ではないのです。でも愛するという選択肢を選び続けてくださっている。神さまだから、造り主だからという義務感で人を愛しているではありません。全く自由な神さまのご意志、神さまの決断の中でぼくたちを愛してくださっている。全く自由な神さまの自発的な、湧き上がる思いの内にぼくたちを愛してくださっている。

だからこそ、神さまの似姿にすがたとして造られた人間もまた、この自由に生きてほしいと願ってくださっている。たとえ、御自分が否定されても。たとえ、御自分が無視されても。たとえ、御自分が軽んじられても。自由のうちに愛し合うことを望のぞんでくださっておられる。

園の中央には2本の木。

ここに神さまの自由な愛を受け止めるのです。たしかに一本は食べるなど禁止されていました。

禁止命令というと、ぼくたちは不自由さをおぼえるかもしれません。

でも、そうじゃない。本当に不自由に縛しばり付けるなら、そもそもそんな選択肢を与えなければいけません。もはや、命の木だけを植えておけばよかった。でもそうしない。そこには、ぼくたちを縛り付けない愛があるのです。

人は、愚かにもこの神さまの思いを忘れてしまいました。そして、この禁止命令に背いて「善悪の知識の木」から実をとって食べてしまいました。

なぜか。

そこにささやく声があったからです。それが蛇です。蛇は言いました。

「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか」（1節）

そして、女がこれを否定すると、蛇は続けてこう言いました。

「決して死ぬことはない。それを食べると、

目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ」（4節）

蛇の言葉は、たったの二言です。

このたったの二言で、人は神さまからの命令に背いて、食べてしまったのです。

蛇は、「神さまは、あなたを縛り付けている。

人が神のような存在になったら不都合だから、嘘をついている」。

蛇は、神さまを詐欺師さぎしのように、人を被害者ひがいしゃのように言ったのです。

「あなたは騙だまされている。神さまに利用されている。

だから、そんな言いつけ守らなくていい」。

あの「自由の象徴しょうちょう」であった園の中央の木を「不自由の象徴しょうちょう」として語りました。「愛の象徴」である園の中央の木を「虐待ぎやくたいの象徴」として語りました。

もっと端的たんてきに言えば、「あなたは神から愛されていない」ということを蛇は語ったんです。でも

もっと大きな問題は、人がそれを真^まに受けてしまったことです。

だから、たとえ知識が増えたとしても、彼らは、自分を受け入れられなくなりました。実を食べた彼らは、自分を「隠す」ようになりました。お互いが裸であることを木にしなかったのに、体を「隠す」ようになった。あるいは、神さまの前からも「隠れる」ようになった。神さまから愛されているということが分からなくなってしまったからです。神さまを信じられなくなってしまった。だから、彼らは、「何をしたのか」と問いただされても。「自分が悪かったのです。ごめんなさい」とは言えなくなってしまいました。自分が悪かったと認めてしまったら、もう自分の価値が見いだせなくなってしまうからです。自分を罪人だと認めたらただ塵^{ちり}にひとしい虚^{むな}しい存在でしかなくなってしまうからです。神さまという後ろ盾^{だて}をなくしてしまったからこそ彼らは「自分の非」を認められなくなった。だから、男は女のせいにし、女は蛇のせいにしました。「自分は悪くない」と頑^{かたく}なになってしまった。

一番の不幸はここに 있습니다。単に神さまの言葉を守らなかったから罰^{ばち}があたった。そんな話じゃないんです。

蛇の言葉^まを真に受けて、神から愛されているということが分からなくなってしまった。そこに一番の不幸がある。

そして、ここにぼくたちの姿があります。

神さまが自由をもたらせてくださるお方だとは信じられず、むしろ自分を縛るものだと思ってしまう。神さまご自身ではなく、他からの言葉によって、自分は神さまから愛されていないと思ひ込む。そして、勝手に、神さまから嫌われたと思ひ込み、神さまに心閉ざしてしまう。神さまという後ろ盾をなくしたからこそ、いよいよ「自分の非」を認めることができなくなってしまう。神さまが何度語りかけてくださっても「ごめんなさい」と言うことができない。それがぼくたちなのです。

でも神さまは、諦めておられません。

「善悪の知識の実」を食べることでご自分を否定する道を選んだ彼らを。自ら言いつけを破り、神さまの愛を信じられなくなってしまった彼らを。なお愛するのです。だから探し出されるのです。「どこにいるのか」。神さまから見放されたと思ひ込む彼らのもとを尋ねるのです。そして問われるのです。「なにをしたのか」。彼らが、悔い改めるやり直す機会をあたえられている。

そして神さまは「裁き」をお語りになります。

神さまの愛を拒んだ彼らがどうなるか。生きることに虚しさや苦しさが伴うようになったこと。

^{むな}虚しさの内に死ぬようになってしまった事実を告げます。

しかし、神さまはこの「裁き」の中でもなお人を思っておられます。

その「思い」を15節に聴きます。

「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に
^{あいだ}間に
^{てきい}わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き
^{くだ}お前は彼のかかとを砕く。」

ここでいう「お前」というのは「蛇」です。

蛇の子孫の頭を、女の子孫が砕くということです。

人間を誘惑し不信感を抱かせるような存在を、神さまは「砕く」とおっしゃる。

その「悪」を打ち砕くという「希望」をお語りになる。

彼らが、何度背いても、どれだけ自分を信じられなくなっても。

神さまは彼らが虚しさの内に死んでいくことを喜ばれないのです。

そう。ぼくたちの虚しさ、ぼくたちの苦悩と付き合ってください。

それどころか虚しさを告げる裁きの中で「希望」をすらお語りになってしまうのです。

この15節の「彼はお前の頭を砕き お前は彼のかかとを砕く」の言葉は、

イエスさまによって成し遂げられた言葉です。

あの十字架においてイエスさまが「かかと砕かれるように」苦しめられながらも、しかし、悪に勝利された。人間と神さまの間に引き裂こうとする力をイエスさまが「打ち砕いた」のです。

悪の「頭」が砕かれた。

だから、まだ完全にすべてが砕かれたというわけではありません。でも、もはや「頭」がなくなった蛇のようなものなのです。「あなたは神さまに愛されていない」とそそのかしてくる声の主は、もう力を失いつつあり、必ず滅ぼされる。ぼくたちは、イエスさまゆえに、この言葉を力強く聴きます。

裁きの中ですら「希望」を語ってしまうことがおできになる。

ここに神さまの偉大な自由さがあると思います。 ぼくたちの罪に捕らわれない。ぼくたちの罪を悲しみつつも、しかしなお愛することがおできになる。どうしようもない罪人に付き合ってください、救い出してくださる自由な、そして偉大な愛があるのです。

このクリスマスに、ぼくたちはあの「りんご」を何度も目にします。

そこには、ぼくたちのどうしようもない「過ち」が示されています。しかし、あの木の実を食べたとしてもなお、神さまがぼくたちをお見捨てにならなかったという大いなる「憐れみ」と「希望」を思い起こすことができるのです。

祈りましょう。

父なる神さま。

あなたの愛を信じず、あなたの言葉を不自由だと思い、あなたに背き、自らあなたに見放されていると思いついでいたぼくたちです。「どこにいるのか」とあなたは見つけ出してくださいます。

「何をしたのか」と悔い改めへと招き続けてくださいます。それどころ、イエスさまによって確かな救いをすら約束してくださいました。あなたの自由な愛を身に受けて、わたしたちもまたあなたを自由に愛するものとしてください。主イエス・キリストの御名みなによって祈ります。アーメン